

結月ゆかり 誕生日

キット。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今年もこの日がやって来ましたね。

ゆかりんが誕生してから早5年。

これを書いた理由はニコニコ動画のライさんの『ゆかマキと人生したい』から触発されたのが一番ですが、今までMMDとかVOICLOIDとか使ってたくせに何故今までゆかりんの誕生日小説とか書かなかったのかと疑問に思っていました。

こんな拙い短編ですが、どうぞ見ていってください。

目次

結月ゆかり 誕生日

1

結月ゆかり 誕生日

2016年12月22日

僕のところにはゆかりさん事結月ゆかりがやってきてそろそろ半年になる。

思い出すのはゆかりさんとの日々。

初めて会った時はかなり緊張してたっけなあ。

『は、初めまして！ゆ、結月ゆかりで、です！』

『ゆかりちゃん、落ち着いて。弦巻マキだよ』

『初めまして、ゆかりさん。マキさん』

『は、はい！』

それから暫くして、二人がボロイアパートに住んでいるって聞いて、家に住まわせる事になったんだっけ。

懐かしいなあ。

『えっ、二人ともアパートに住んでるの？』

『うん、それも隙間風とかある最悪な奴。あくあ、どこかに美少女二人を住まわせてくれる人いないかなあ〜(チラツ)』

『ちよ、ちよつとマキさんっ！すみませんマスター。気にしないで良いですからね？』
『え？良いよ。二人くらい』

『えっ!?!』

『おっ！やったく！これで隙間風生活とはおさらばだあ！』

『ちよ、ちよちよ!?!マスター、良いんですか!?!』

『えう、うん。部屋は余ってるし、一人より三人の方が楽しいし（何より、嬉しいし）』

『うん！決まりだね！これからよろしくね、マスター』

『え、ええつと。よろしくお願ひします……?』

『うん。よろしく』

それからは毎朝ゆかりさんが朝食を作ってくれるようになったんだよね。

あれからは毎朝が楽しみになったなあ。

『あれ？ゆかりさんが作ってくれたの?』

『はい、住まわせて貰ってますから。これ位はと思ひまして。………迷惑でした?』

『そんな！むしろ嬉しい位だよ！女の子の手料理だなんて………!』

『そ、そうですか………』

『うん！ありがとう、ゆかりさん』

『い、いえいえ。取りあえず座っていてください。もうすぐできますから』

『うん。わかった』

テーマパークに遊びに行ったときは凄く楽しかったなあ。

『うわあ………つ！マスター、マスター！ジェットコースターがありますよ！』

『あはは、そうだね』

『ゆかりちゃんはしやぎすぎだよ』

『あつ、す、すみません／＼／』

『いいよいいよ。それじゃあ乗ろうか』

『！はいっ！』

そう言えば、ゆかりさんが風邪を引いた時は焦ったなあ……

『大丈夫？ゆかりさん』

『うう………ずびばせん、マズダー』

『はいはい、気にしないの。ゆかりさんは病人なんだから』

『ずびばせん………』

『元気になつたら、ゆかりさんの大好きなケーキ作ってあげるよ』

『ほ、本当ですが………？』

『うん。だから、早く元気になろうね』

『ひゃい………』

あ、誕生日を祝ってもらった時は嬉しかったな。

『ただいまー』お誕生日おめでとう（ぎぎいます）！マスター』うわっ!？』

『おっ、驚いてる、驚いてる♪』

『えっ、えっ？誕生日？僕のか？』

『はい、マスターの誕生日です！』

『あつれ〜？忘れてたの〜？』

『……………あ、そうだった』

『あ、あはは、マスターらしいと言うか』

『まあ、マスターだしね〜』

『ゆかりさん、マキさん』

『ん？（はい？）』

『ありがとう、嬉しいよ』

天体観測なんかもやって、意外とゆかりさんが星に詳しい事が分かったなあ。

『あれが冬の大三角形』

『あ、知ってます。あれがシリウス、ペルシオン、ベテルギウスですね。それでベテルギウスを中心とした周りのポルクス、カペラ、アルデバラン、リゲルと先ほどのシリウス、ペルシオンを結んだものを冬のダイヤモンドと言いますね』

『ゆかりちゃんは物知りだね〜』

『えへへ、月の観測をしているときに覚えたんです』

『へえ〜』

本当に色々遭つたなあつと、もう玄関に着いてしまった。

僕はポケットから鍵を取り出して、玄関を開けて挨拶をする。

「ただいま〜」

「あ、お帰りなさい、マスター」

「お帰り〜」

そう言つて僕の挨拶に作業を中断してゆかりさんとマキさんが迎えに来てくれた。

僕は上着を脱ぐとゆかりさんが受け取つて掛けてくれた。

「どうだった〜?」

「うん。ちゃんとケーキも買つてきたよ。さあ、晩御飯にしようか」

「そうですね。すぐ並べますね」

「あ、わたしも手伝うよ。ゆかりちゃん」

そう言うと二人はリビングに行つてしまった。

僕も手伝うために服を着替えに二階の部屋に向かう。

部屋に着いた僕はスーツを脱ぎ、私服に着替えて、下に下りる。

「あ、準備できたよ〜」

「ありがとう、マキさん。お疲れ様、ゆかりさん」

「いえいえ」

一階のリビングに来ると、すでに色々と豪華な料理が並んでいた。

本当は僕が作りたかったんだけど、仕方ないね。

「それじゃ、席に着こうか」

「うん」

「はい」

そうして僕達は席に着くとマキさんが目配せをして来た。

それに頷いてゆかりさんに向きを変える。

「ゆかりさん（ちゃん）」

「はい」

「お誕生日、おめでとう！」

そう言つて僕とマキさんはクラッカーの紐を引いて中から紙くずを飛ばした。

「うふふ、ありがとう」

「えへへ。それじゃあ、私からのプレゼントね」

「わあ！開けて良いですか?!」

「良い良いよ〜♪」

マキさんが黄色い箱を渡し、ゆかりさんが開けると、中には紫色の宝石が入ったアクセサリーが会った。

「僕からはこれね」

「ありがとうございます………これはっ！」

「わあっ！かわいい〜！」

僕は紫色の箱を渡し、開ける。

すると中には紫色のゆかりさんと同じパーカーを着たうさぎのぬいぐるみだった。

この日の為にちよつと徹夜して作っていたのだ。

「ありがとうございます！マスター！」

その後は晩御飯を食べて、皆でゲームをして大いにはしゃいだ（途中でマキさんが酒を飲んで酔っ払った）。

今日はいつとも以上にとても楽しかったなあ。

来年はもつと、もつと楽しい事が出来るようにしたいね。

そう思いながら疲れて眠ったゆかりさんを部屋に運び、布団を掛けて部屋を出る。

扉を閉めるときに、ゆかりさんにお休みと言い、もう一つの言葉は心の中に閉まって

置いた。

ハ
ツ
ピ
ー
バ
ー
ス
デ
イ
、
ゆ
か
り
さ
ん